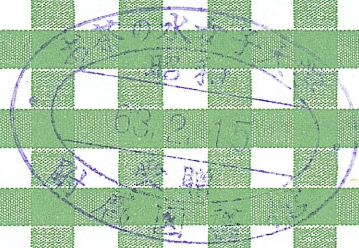


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 **9**



スペースにマッチ。予算にマッチ。
子供の 気持ちにぴったりマッチ。



フレール館の
オリジナル図書室
システム誕生

セット例(Bセット) 合計507,000円

組み合わせ自由。
夢は無限に広がります。

スペースに合わせた図書コーナー

●幼児教育に実績をもつフレール館が開発した図書室システムは、現在あるスペースに合わせられる、システムファニチュアです。組み合わせは自由自在、単品でも使えます。保育室の図書コーナーから図書室の総合レイアウトまで、好きな形でご利用いただけます。もちろんレイアウトの変更も思いのままです。書架とイス、テーブル、ソファ、マットなど必要な数だけをセットするわけですから、費用の点でも無駄がありません。 <

19種類の中からスペース・ご予算に合わせてお選びください。

システム書架・直線/システム書架・曲線/システム書架・コーナー/システム書架・台形/書架ワゴン/ソファーマット・A/ソファーマット・B/ソファーマット・六角/L型ベンチ・大/L型ベンチ・小/テーブル/書架ベンチ/書架/アンパンマン書架/大型回転マガジラック/1連書架・窓下傾斜/2連書架・窓下傾斜/1連書架・傾斜/2連書架・傾斜

フレール館が選んだバラエティ豊かな本のラインアップ

学校図書館選定図書を中心に幼児に適した本も、フレール館で一括して購入できます。ぜひご利用下さい。

くわしくは、担当営業マンに
ご相談ください。

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレール館

幼児の教育



第八十六卷

第九号

幼 児 の 教 育 目 次

—— 第八十六卷 九月号 ——

© 1987

日本幼稚園協会

自我を育てる

—— 発達の動力を生み出す保育 —— 津守 真 (4)

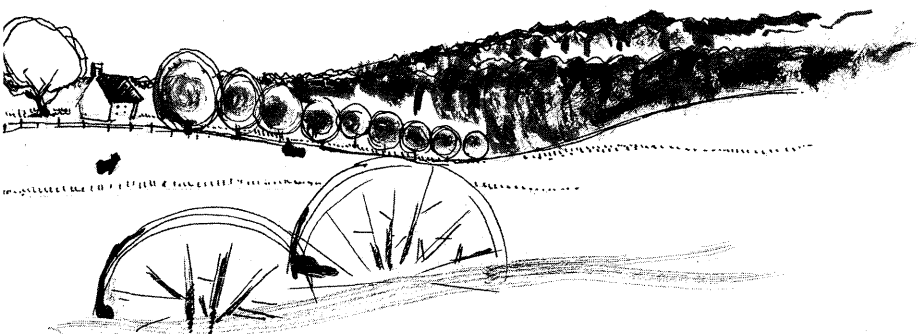
S F 的読み解き 子どもという風景

第29回 気の宇宙へ 堀内 守 (11)

重兼 芳子「闇を照らす足おと——岩下壮一と神山復生病院物語」(春秋社)を読む

..... 中村 弓子 (21)

ふくろうのつぶやき 全体が見えるかね 真壁 伍郎 (26)



ゆうびんやさん おとしもの……………國吉 栄…(36)

兔園隨筆

手、その他……………蕪木 寿江…(42)

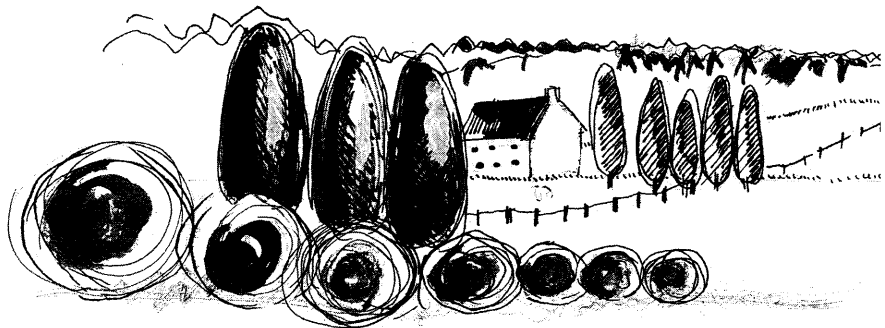
子どもの会話……………無藤 隆…(44)

「錦にしきの中の仙女」……………近藤伊津子…(50)

若いおかあさんたちへ

『友だち』ってすばらしい……………はるにれの会 川上 美子…(56)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 誉子
土屋真美子



自我を育てる

――発達の動力を生み出す保育――

津守 真

子どもと一緒に過す「いま」を充実させるとき、そこから子どもの能動性が動きはじめ、社会性が生み出される。

前号と前々号に記したが、私がみなければならぬクラスの子どもたちのことを気にすればするほど、K男は私の手をひいて歩きまわり、要求し、私の注意を他に向けることを許さなかった。

私がK男と過す「いま」をたのしむことができるようになったときから、事態は変化した。これは私自身にも驚くほどで、毎日何か新しいことをK男ははじめた。保育の実践をしている人は、同様のことをいろいろの場で体験しているのだと思うが、これは現実の社会の場で保育者が自分自身を実験台にして発見していることである。

追いかけてこのはじまり

六月のはじめ、K男は登校しずっとたつてから、幼稚部の部屋にいる私のところにきた。これまで、朝いちばんにK男は私を探しまわるのが常であった。

私は立ち上り、庭から入ってくるK男に近づき、立ったまま体をかかえて顔を近寄せるとけらけらと声をあげて笑う。それをくり返すうち、トランポリンのまわりを走り回りながらふり返って笑い、私に追いかけさせる。私が追いかけてつかまえ、抱きかかえると大声で笑う。戸口から庭の方にK男はかけてゆくが、私は室内の子どものことが気になるので、戸口でK男に應待する。そのうちにガラス戸をへだてて顔を合わせ笑い合うのが面白くなり、K男は庭に走っていったのは戸口にもどって私と笑い合うことを何十度もくりかえす。

私はK男だけを相手にするわけにゆかず、K男が庭の方に走ってゆくたびに他の子どもに向うのだが、じきにもどってきて私に追いかけさせ、ガラス戸ごとに顔を合わせ、大きな口をあげて笑い合う。K男は髪の毛の中も背中也汗びっしょりである。こんなに単純なことがK男にとってはどんなに面白いことが察せられる。

そのうちにK男は滑り台に下からのぼり、私についてきてほしそうだったが、私は室内からはなれられないでいたら、どこかにいってしまった。あとになって分ったのだが、この間一時間ぐらい、庭の流しで他の子どもたちや先生と一緒に水で遊んでいた。

この日にはじまった私に追いかけて笑い合う遊びは、追いかけてこの端緒だろうと

思う。ふり返ってみると、つい一週間前までは、K男は私に顔をびったりと寄せ目を合わせて笑い合うやりとりを好み、私から離れようとしなかった。そのやりとりが、空間的に距離をへだて、時間的に間をおいてなされるようになったのである。汗をかくほどにこうして過す時間を充実させ得たときに、K男には充実した能動性が生れ、その同じ能動性をもって別の活動に向っていった。

「いま」を肯定する

K男が私のところを去ったあと、Y子がO先生とトランポリンにきた。Y子はこの数週間、O先生にくっついていることが多いのだが、この日もトランポリンをとぶのでもなくおりのでもなく、大人によりかかって時を過している。私は第三者として見ているときには、形にはならなくとも先生と過すこうした生活がY子に必要であることがすぐわかる。しかし、自分がその立場におかれると、もっと秩序のある違った生活の仕方がありうるのではないかと考えてあせることがある。どうしてなのだろうか。だが、そう思うことには、その子どもと過す「いま」の生活を肯定していかないことになる。もっと違った生活になってゆくにしても、子どものいまの生き方をそのままに肯定するところから、未来は生み出される。K男のことを考えても、私から離れようとしなかったそのK男を肯定し、共に過す時間を充実させようとしたところから、この日の追いかっこは生まれたのであった。

自我

一時間ほどたって、K男が私のところにもどってきたとき、以前やっていた顔を密着させ目を合わせて笑いあう遊びを私に要求した。長い時間私からはなれていたので、十分につき合うことが必要と考えて、私は何度もその遊びをした。そこに突然Y子がきて、K男の髪を引張った。K男は泣き声を出して立ち上り、私の手をひいて部屋を出た。私はK男にひかれて一緒に庭に出た。

以前だったらこういう場合、K男はどうしてよいか分からなくなり、自分を喪失し、声を上げてふらふらと歩きまわるだけだった。この日はしっかりと私の手をひいた。それからK男は滑り台を下からのぼり、いつものようにバルコニーの棚の一端に私の頭を固定させるのだが、こうでもない、ああでもない、いつもよりいろいろに試みる。どうやったら私を確保しておけるかを考えているみあいである。そのうちに、二階の窓から室内の大人の顔がみえると、その人に声をかけて笑う。さっき髪の毛を引張られたことは、もう忘れたかのようにであった。

髪を引張られるという、K男にとっては突然の受け身のできごとが起ったとき、すぐに平常にもどるほどに、それに立ち向う自我の強さができたと云ってよいだろう。自我の輪郭などほとんどないかのように、だれかに叩かれたときに手向うこともせず崩れてしまったK男であったが、いまや、しっかりと自分を保っている。水あそびで自分の手に握っているホースを、他の子どもがとろうとしたときも、放さずに持っているのである。何週間

も私にくつついてはなれないように思えたその間に、K男にこのような自我の強さができている。

だるまの目玉に色をぬる

職員室にいくると、K男はまず窓をあけ、道路を走る自動車をしばらく見てから私と顔を接して笑い合う遊びをするのが常であるが、この日は、K男は窓をあけることもせず、柵の上の大きなだるまをおろして、目玉をマジックで塗りはじめた。それは数日前からしているのだが、目玉をぬりはじめると他のことは目にはいらなくらい、ぬることに余念がない。赤、青、黒、紫などでぬりこめられただるまの目玉は、青黒く光っている。K男は自分を打ちこむ対象を見出した。そしてぬり終ると、私におぶわられて保育室に出ていった。

ふり返ってみれば、K男はずっと前から人の目に関心をもっていた。二年半前に私共のところに来たときには、目を合わせる事が少なかった。それから絵本で顔の絵をとくべつに好むようになり、また、私を片隅に押し込めて、目を見合う遊びを長い期間にわたってやった。いま、だるまの大きな目玉を、自分の手を使って、マジック、えのぐ、鉛筆などで熱心にぬるのは、この子どもにとって人の目がとくべつな意味をもつからだろう。ときによって、K男が私の顔をうかがい見るときの目は、私の目の奥にひそむ心を見透しているように思うこともあった。

K男の心に長くひそんでいた精神的課題が、いま、自分を打ちこむ活動に表現されはじめた。

食事

この日、弁当のとき、K男はじっと坐って食べつづけた。いつものように途中で何度も立たない。手で食物を口にいれて食べるのは、外界の物を自分の中に取り入れる行為であって、生物的要求と結びついた、自我の確立の初期段階に属する。K男が私にくっついて離れなかったときも、弁当のときには、自分の手で食物をひとくち口にされると、私からはなれて庭に出ていった。食物を摂取することを通して自我の領域が確認され、自分がいと思うことをするのが容易になる。幼稚園でも、昼食のあと、子どもたちが自分らしい遊びをはじめるのはこのことの故でもある。

この日、K男は最後まで坐って弁当をすっかり食べ終ると、庭に出てゆき、それきり私のところにもどってこなかった。

他の子どもを避けない

帰りの時間に近くなって私は庭に出たときK男に出会った。K男は私の手をひいてシーソーにゆき、しばらく二人で乗っていると、別の子どもがきたので、私はその子どもと位置を代った。しばらくの間、子どもたちだけでシーソーをこいでいた。以前だったら、他

の子どもが同じ場に來ただけで、K男は私の手をひいてその場を立ち去ったのだった。

社会的になること

K男は、いろいろな大人たちの顔をのぞきこんで笑う。もはや、前号に記したような私との間の閉じた空間の中にだけいるのではない。K男が充実した時間を生き、能動性が生まれ、自我が確立してきたときに、他の人に対して関心をもちはじめた。K男自身が社会化されてきた。これは社会への適応とはちがう。子ども自身が内側から社会化され、社会的人間となることである。

保育者と共に「いま」を充実して過すとき、その充実感是他の物や人にも向い、子どもは能動的に世界とかかわるようになることを、新学期の二ヶ月間に私はあらためて知らされた。個々の活動をやらせようとあせるよりも、子どもの自我を育てることに力をつくすならば、子どもは自分のしたいことを自分で見出し、価値ある活動を展開させる。

四月からの子どもの変化をかえりみると、この変化を発達と云ってよいであろう。毎日の保育の中で、疑い、試み、たのしみ、考える日を重ねるうちに、私が問題としていたことは解け、子どもは一步先に進んでいる。発達を生み出す動力は、大人と子どもとかわる保育の生活の中にある。

(愛育養護学校)

SF的読み解き
子どもという風景

第二十九回

堀内 守

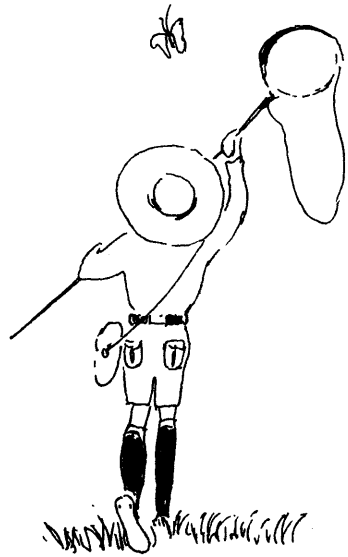
気の宇宙へ

「気」のふくらみ

それが存在することはたしかにわかっている。けれども、うまくことばでは表現できない。もどかしい。とはいえ、一步のいてみるならば、この種のことはいくつもあるのに気づく。

「気」などはそのチャンピオン、ともいうべき地位にある。

あらためて考えてみると、「気」は私たちの日常生活のなかではさかんに姿を現わし、「気をつけよ」とか



「元気を出せ」とか、「気になる」とか「気まずい」とか、いろいろな表現とともに登場する。

このように、頻繁に使われていて、便利なことばなのである。

日常使われている便利なことばは、大体においてなめらかで、ひっかかるところがない。逆にいえば類型的なのだ。「はてな？」と思わせるようなことはあまりない。「元気」などはその典型で、「元気がいいね」とか「お元気ですか」などは、「元気」という事実を指すとい

うよりも、相手への心づかいの表明にすり代わっている。

「お元氣そう、ですね」などは、「元氣」という事実に関してはほんの少ししか言及していない。むしろ、相手への「思いやり」「氣づかい」「おせじ」「ヒニク」などの含意の方が事実よりも重要になっている。

日常場面から少し離れてみると、「氣」の現われ方は驚くべき広がりを見せはじめる。

「氣」の変幻

そもそもが面白い。「氣」の発生的な場をさぐっていかくと、神話的になる。「氣」は、天地の間を満たすと考えられるモノ、のことであった。謙虚にふりかえってみると、この説明はまことにみごとである。天地の間を、というような壮大なパースペクティヴ（視野）だとか、「満たす」というような具体的であるような、それでいて比喩的でもあるような表現があり、さらに「モノ」という名づけがたいモノを暗示しているからだ。

もっとも、サカシラなふるまいをする人から見ると、こういう説明は古くさくきこえるだろう。しかし、しばらくは、「氣」のも、やも、やにおつき合いただきたい。

半分サカシラになってみよう。「氣」は「スピリット」である。「精」「靈魂」「精神」という意味のグループがある。また「幽霊」という意味もある。かと思うと、「スピリット」は、そのものズバリに「人」を指す。

「氣分」の意味もある。複数になると、「氣力、元氣、氣概」などになる。「酒精」の意味もある。(アルコールのことですね。)

このように、英語とでも、なかなか一筋縄ではいかない。そこがまた氣になるところ。

古代中国では「二十四氣」というような、氣の遠くなりそうな季節の分類をやっている。立春からはじめて、大寒にいたる分類である。日本の歳時記よりも氣骨がある。

こう考えると、どう見ても、「氣」は、個々人の「氣

分」や「氣力」を超えた一つの形而上学的な觀念といわねばならない。そこで、ふたたび古書をひもといてみる。

いちばん古いものは、「氣」をもって万物の生ずる根元（どうか、コンゲンとおよみください。ネモトではサマになりませんから）と説いている。「天地正大の氣」というような表現もあるくらい。（注、藤田東湖の漢詩です。）

ついで、「氣」は生命力になる。生命の原動力となる勢いのことである。笑ってはいけません。今日でもこの意味の「氣」は、いぜんとして勢いよく使われているから。「氣勢をあげる」などがその典型。

「氣」と子ども

さて、「氣」に関してはまだまだ説明は続くのだが、さしあたってはこの辺で小休止をして、「氣」の神話的な意味が子どもとどのように結びつかを見てみよう。

「いずこより来たりしものぞ」と問うてみると、子ども

もの由来はまことに神話的で、詩的ですからある。その生活リズムは夜昼、春夏秋冬、いや二十四氣とともに勢いを変えていく。また、その勢いのさらに根元にある勢いのようなものが、しかるべく見つめているようなところがある。

もちろん、この考え方にも古今東西の差はある。農薬国日本では「葦牙わしの如く萌もえ騰たかる物に因よりて成れる神」と『古事記』がいうように、「小さな芽」に対する呪術的な信仰があった。「素朴」さや「嬰兒みどりご」に帰ることを肯定する老子の道教思想とより合わさって、「子宝」の考え方にもつながっている。

この場合、「氣」は、やわらかく、ふわーと万物を包んでいる。

他方、「氣」は、子どもにおいて、不気味な姿をとって現われることもある。もはや「氣」は、甘い、ふわーとした柔らかいものではなく、「氣が遠くなるような」「氣が触れる」ような、「氣を失なう」ような激しさをもってしまふ。コントロールがきかない。子ども自身が自己

コントロールを失わない、まるで「気が触れ」たようにわめき散らし、ころげまわる。

かと思うと、次の瞬間には、そんなことをけろりと忘れて、「気分よく」遊んでいる。

それを見ていると、子どもの心だけの、心理的な説明では解ききれないモノが多いことに気づかざるをえない。「気が短かい」とか、「気が散る」とか、「気詰り」というような「気」の場面は、これはこうだというように一本調子で説明ができない面をもっているというべきだろう。そのことを承知した上で「気」をふたたびたどってみよう。

「気」のはたらき

私たちは「○○気」「気△△」というように、いくつもの表現を用いている。そのため「気」そのもののふくらみや広がりについてはほとんど「気にしない」である。「元気を出せ」と相手に呼びかけている人でも、「元気」というときの『気』はどのようなモノなのかなどと

は「気にか」けない。

もし、「元気を出せ」という表現をするときに、いち「気」の元の意味を「気に」したり、「気をつけ」たり、「気が気でない」ようだったら、それこそ「気がかり」である。時には「気が触れ」と見なされるだろう。

だから、大体は、「気」はそんなに「気にか」けられてはいない。そのかわり、一応の了解が共有されている。すなわち、心のはたらき、心の状態、心の動きを示すときに「気」を使うと。

ただし、この語が用いられる個々の文脈において、心のどの面に焦点をおくかはさまざまである。

少し、それを整理してみると左のようになろう。(それでも大変複雑である。)

第一は「気」をもって「精神」にひきつけて解する場合である。「気がめいる」「気をしずめる」などがこれで、子どもという観点から見ると、これらは短かい間隔でよく起こっているといえる。しかし、長続きはしない

から「気が楽」である。

第二は、微妙な「気」。これはコトに触れてはたらく心の端々である。「気がきく」「気が多い」「気が散る」などである。しかし、「気が多い」とか「気が散る」が苦もなしに生ずるのに対し、「気がきく」は、「気」がある志向性を鮮明にするとき生ずるといふ違いがある。つまり、「気がきく」は、求心的で、「気が散る」「気が多い」は遠心的といふべきか。

したがって、「気が散る」とか「気が多い」は、えてしてお叱りの対象になるが、「気がきく」はおほめの対象になる。親や教師には思い当たることばかり。

第三は、接続する精神の傾向のこと。「気が短かい」とか「気がいい」など。接続する精神の傾向だから、他者がこれを見抜くことができ、予測することができる。

「あの子は気が短かい」などという。とはいえ、この「接続」は、ずーとそのまま続くわけではない。「気が短かい」ような「傾向」をもっていった子が、実はその「傾向」を修正し、変換していくから「気が楽になる」。「気

がいい」という表現が二重の意味をもっていいことでもその可能性がつかめよう。「気がいい」とは、時によってはほめことば、場合によってはけなすことばになる。

ほめとけなしの双方のあいだから、もの悲しく、ほほ笑ましく、意味が生まれることもある。例「気のいいあひる」という歌ご存知ですね。

第四は、持続する精神の傾向というような持続性ではなく、いま、ここである事をしようとすることを指す。

「どうする気だ?」「気が知れない」などである。「気がない」などもここにはいる。ウォーミング・アップ以前というべきで、この場合は、叱りやおだての対象とはならない。形がさだかでないので、叱ることもできないし、ほめることもできない。むしろ、形がさだかでないのとまどっているわけである。

第五は、関心。心がひきつけられている。「気が進む」「気を入れる」「気がある」。右の第四とくらべてみると面白い。すなわち、第四の場合には「気」がまだ形をととのえていない。それに対し、第五の場合には明ら

かに「気」はある対象へ向かって姿を現わしている。

それを一歩進めると、第六が出てくる。

第六は、形をととのえた「気」が、ある対象のまわりをまわる状態だ。「気をまわす」「気をもむ」「気に病む」など。

第七は、明らかに感情の動きを指している。「気をわるくする」とか「気まずい」などである。

このように整理してみると、子どもはこのうちのどれにもかかわりをもっているが、子どもの「気」は、これらの分類のあいだを忙しくとびまわっているし、まるでこのような分類のあいだを「かくれんぼ」でもするよう「ここと思えばまたあちら」式に動いているといえるほどだ。

「気」と場

「気」を考えていくと、結論を一つだけ出して、キレイにまとめる——のは気が進まない。むしろ、変幻のあとや多様なありさまをそのまま認めたいという気にな

る。

ふだんはそれと意識しないのに、あらためて考えると、「気」は、実のところ不定型なものであることがわかっていく。たとえば、その場の「フンイ気」を例にとってみればよい。モノとして示すことはできないが、「フンイ気」は生きていて、私たちを「くつろがせ」てくれたり、「いたたまれなく」させたりする。あとで「気で気を病ん」だり。

はっきりとは見えない。が、その場にただよったり、かもし出されたりするのが「フンイ気」だ。建築学上は同じ教室であっても、二つの教室の「フンイ気」は大いに違う。団地やマンションの場合もそうで、似たようなツクリの各戸は、それぞれ別の「フンイ気」をつくり出している。人が住んでいるからだ。時の重なりのおかげ、場は「フンイ気」をもちはじめ、独自の「フンイ気」をかもし出してくる。

はたらきかけ、かつはたらきかけられる。そういう関係のなかから「フンイ気」は生まれる。

「氣」の組み合わせ

「氣」と結びつく漢字を並べてみると、これまたふしぎな「氣はい」がしてくる。放射型にきれいにまとまるので氣持がいい。

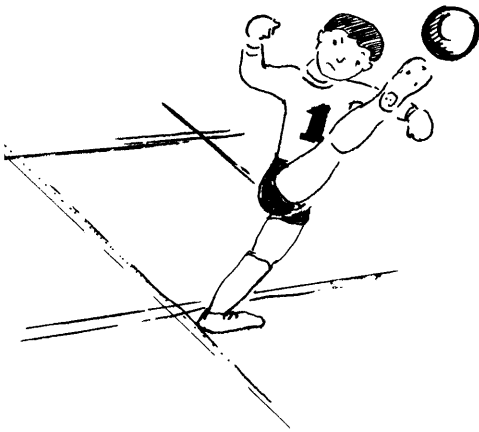
さすが、理科系のことは意味がふくらまない。輪郭をきちんとつけようとしている。気化、気圧、気候、気泡……。これに対し、ほかの「氣○○」は、まことに「氣宇」壮大で、「氣骨」があり、「氣品」があり、「氣

風」がある。かと思えば、「反対に「氣炎」をあげてはいるものの、「氣合」が入らず「氣息」エンエンで、「氣力」の「氣配」もないようなものもある。

他方、「○○氣」の方は「元氣」という頻用度の高いものから「霸氣」「活氣」「心氣」と、やたらに意気まいているものが多い。

動詞を並べてみれば、そこにも形の上で面白いグループ分けが可能である。

第一は「に」のグループである。「氣になる」「氣にす



る」「気にかかる」など。

第二は「を」のグループ。「気をくばる」「気をつける」「気をうしなう」「気をはく」「気をくさらす」等々。

そして第三が「が」のグループ。「気が散る」「気がひける」「気がめいる」等々。

気乗り

こういう分類をたどってきて、「気」がある構造をもっているのではないかと気配りをするようになった。気遣うことも多くなる。

当初、気ままに、気を紛らすだけだったようなテーマのごとく見えただけに、いまではだいたいぶ乗り気になって「気」が気にいってきた。

そこでふたたび整理してみる。

私たちは、形のない、ぶよぶよしたものの、どろどろしたものにであうと、不気味に感ずる。その場合の不「気」味さは、ことばではうまく表現できず、わずかに

「何ともいえない」という言語的表現があり、また「言うに言われぬ」とか「異なもの」というような非日常的な表現しかない。

とはいえ、このわずかな表現は、何ともいえないニュアンスをもっている。「何ともいえない」という表現が何ともいえない味をもっている。「うまくいえないが……」と断わりながら、異物、異世界が気になることをみごとに表現しているからである。「うまくいえないが……」と断わりつつ、何とかしてうまくいおうと気を張りつめているのがよくわかる。

気が乗ってくれば、「うまくいえないが……」が何回も挟まれよう。そのあげく、かなり「うまくいえ」ているというような事態も生まれてくる。

気が乗るとは右のような持続がつきつきと生まれてきて、増幅されていくことを指している。

「気乗り」は「フナイ気」と関係がある。「気がない」状態や、「気が散る」状態は、「気」が拡散し、紛れている段階である。その段階から「気になり」「気にする」

段階に進むには何か契機にならない。「気をまわ」している中間段階がある。下手をすると「気まま」のまま終わってしまう。

それを超えるにはまわりの人びとの「気遣い」や「気配り」がモノを言う。「気配」が子どもをつき動かす。こうなると、「気」は、あの神話的な「気」を開き、子どもの「やる気」を触発し、誘発し、持続させ、「気分」や「気色」を喚起し、「気合い」や「気丈」を生み、「気っ風」も生んでいく。

気をつけ！

あの「気をつけ！」という号令は、日常ことばの「気をつけなさい」とつながっているはずであった。多くの国のことばで調べても同じである。にもかかわらず、あの「気をつけ！」という号令には、「気」の多様なあり方を無理に抑え込むところがある。

いかめしくも「不動の姿勢」と呼ばれるこの姿勢は、瞬間的に注意を一点に集中させるといふねらいがある。

持続するリズムを遮断し、みずからを機械のようにピタッと止め、静粛のなかに送り込む。

気の弱い人にはまことに気が重い姿勢である。あまりに緊張が続くと、抑え込まれていた雑念がもぞもぞと頭をもたげてくる。それまで気にならなかった事どもが、一挙に動く気配を示し、不動の姿勢を嘲笑するかのようになる。

「不動の姿勢」は、子どもには無理である。厳肅さが高じると、どうしても笑いたくなるのが子どもである。だれかが、しわぶぎをすると、厳肅さのなかで、つぎつぎとしわぶぎが伝染していき、厳肅さにヒビが入るのもそのためである。

そもそも、日常たえまなく使われている「元気」なることばも「元・気」と分けてみると、少なからぬ混乱や困惑をもたらす。ゲンキのゲンギ（原義）は——とたずねていくと、あるところから先は、もやもやとしてしまふのだ。気力が弱まったとき、ひとは宇宙の気に触れようとしてさまざまな試みをする。叫び、踊り、飛び跳

ね、アルコールをのみ、日常の秩序をつき抜けたところで新しいフンイ気にひたり、「ゲンキ」になって戻ってくる。

この気分の変幻は、移り気なところもあり、やたらに「気分」に応じて、まわりを異なったものとして描き出す。同じ雪でも「楽し気」に浮いているように見えたり、「悲し気」にただよっているように見えたりする。のみならず、「悲し気」な歌を「楽し気」にうたうことだって可能なのである。

元気の呪術性

「元気を出せ」という呼びかけは、かけないよりはかけた方がよい。それで状況は変わる——と期待されている。その「元気」は、明治以降、子どもの歌の主流をなしてきた。「元気で体操」「みんな元気で」「元気よくとび起き」「元気で歩く」「元気で運動会」「元気で勉強」「元気で遠足」「元気な子ども」。ホントに「元気」でいっぱいである。

いや、学校ばかりではない。日常人びとがフツの場で、フツーに交わす会話のメモを取ってみると、いちばんよく使われているのが「やあ、お元気ですか」なのである。もって、いかに「元気」が人びとの間柄の調整をしているかがわかる。

やたらに元気過ぎるのも問題である。それは「気で気を病む」というようなことにもつながるし、「気炎をあげ」「氣勢をあげ」ることに気を集中し、気遣いを忘れるからである。

「気」は子どもの風景の大半をおおい、その多様さがかいま見せてくれる。少なからず気になる広がりをもっている。と、気がついて、近代思想の「気取り」の「気」の狭さに「気をもん」で、子どもを見たら古今東西の「気」が全部見られる思い。

(名古屋大学)

重兼芳子「闇をてらす足おと——岩下壯一と神山復生病院物語」(春秋社)を読む

中村 弓子

作者がこの本を書くきっかけとなったのは、昭和万葉集に四首ほど掲載されたハンセン病の男性の歌人がいるということを知って、神山復生病院に出かけておこなった取材である。病のため盲目のその歌人は、朗読テープで聞いた作品を通じて既に作者と旧知の間柄であると知ると急に親しさを示し、そして堰を切ったように四十六年前に亡くなった岩下神父のことを語り出したのだった。ただひたすら神父の面影を追って話し続けるその歌人の顔を作者は茫然と凝視し、一人の間

の中に四十六年間も生き続け、苛酷な肉体的条件と闘う支えになっている岩下神父とはどのような人か、と心惹かれ、取材はそのまま岩下神父の取材になっていったのである。これは、生き証人たちの気迫に押され、逃げ腰の時は引き戻されるようにして「書かされてしまった」本だ、と作者は言う。

さて、作者がそのようにして我が意ならず書かされてしまった岩下神父像がどのようなものかを見る前に、今ここで私自身が岩下神父という人物に心惹かれた個人的なきっかけ

について簡単に触れるのを許して頂きたい。まず第一にそれは、私があるキリスト教関係の施設で見た壮年期の岩下神父の写真であった。その眼は内側から燃える火に輝いている。と同時にそのまなざしは、こちらの存在を突き抜けたところを凝視する鋭さを持っている。まなざしに宿るこの二つのものの共存が私に稀有の人物を垣間見させたのである。もう一つのきっかけ、それはフランスの哲学者モーリス・ブロンデルと文学史家アンリ・ブレモンという二人の巨人の間に交わされた四十年近くにわたる往復書簡を収めた三巻本である。その中にたった一人の日本人が登場する。それが他ならぬ岩下神父なのである。一九二〇年という年にブロンデルは、当時留学中の岩下神父についてブレモンに次のような言葉で語りかけている。「私の喜びである日本の青年、岩下壮一にもう会いましたか」

大ブロンデルに「私の喜び」と言わせるのはどのような人物だろうかと思ったのである。さて、その岩下神父は日本に帰国後、囑望されていた中世哲学者としての研究活動の多くを犠牲にして、ハンセン病の神山復生病院の院長の仕事に携わることになった。その院長としての岩下神父の人物像を本書は、主人公のハンセン病患者の置かれた深い闇の側から見える姿として描き出している。その中でも特別に印象的な三つの闇の情景があり、それはそのまま岩下神父の最も印象的な姿と重なる。

主人公の「わたし」の時代にはハンセン病になると患者は巡査に連れて行かれて、薬や注射で殺されるといふ噂があり、そのため「わたし」は祖父によって土蔵にかくまわれて、日中は薄暗い中で息をひそめて過し、夜だけ外に出るといふ夜行動物のような生活を

していた。そのような遺棄された悲嘆の闇の中に、ある日、扉の方から、「起きて下さい、眼をさまして下さい」と呼ぶ静かで哀しげな声がある。祖父の前に立ったその人は、ためらう様子もなく土蔵の中に入ってくると「わたし」の手を取って外へ連れ出しながら言った。「夜が明けぬうちに、村の人が起きてこないうちに私と一緒に行きましょう。そのまま私について来なさい。あなたは人間の中でもっとも美しい人になることができます。」それが岩下神父であった。

第二の闇。それは情念の闇である。「わたし」はふとしたきっかけで目にした女子棟のある女性に夢中になる。しかし、この病院では結婚は禁じられていた。患者が子供を持つことが許されなかったのはこの病院でも同じだったが、結婚しても子供を産むことを禁じるというような自然の摂理に反することを

は神の摂理にも反することとして、この病院では結婚そのものが受け容れられなかったのである。相手の女性は、結婚が許されないことと、自分の病気が進行していることに絶望して醜くならないうちに一緒に死にたいと言う。熱で喘いでいるその女性を背負って深夜、東海道線に向って「わたし」は急ぐ。その時うしろからもう一つの足音がして、突然その黒い影が背中の女性を抱き取り道端へ横たえた。岩下神父だった。そして神父は「わたし」の足もとにひざまずいて言ったのだ。「あなたの気持はよく分ります。人を愛するのは尊いことなのです。けれども今はいけません。どうか許して下さい。」

第三の闇。それは病院の毎夜、毎夜の見廻りの闇である。岩下神父は必ず深夜に一度見廻りをした。弔いのあった夜は患者の動揺を考えて深夜と明け方の二度、自殺未遂をし

た患者の部屋のの前ではその恐れがなくなる時期まで毎夜ひざまずき頭を垂れて祈っていた。「わたし」たちは布団の中でその足おとを聞きながら、足おとが何かを語りかけてくるような不思議な安堵を覚えてぐっすり眠ることができたのだった。闇は岩下神父の足音ゆえに愛の闇となり、岩下神父の死後も、「わたし」の失明後も、聞えてくるその足音が「闇をてらす足音」となったのである。

しかしそれにしてもなぜ岩下神父は「わたし」の中に四十六年も生き続け、支えになりえたのか。それは、「わたし」が情念の闇から無理矢理ひき出されたあと「神父さまも男なら、裸のままの気持をさらして下さい。生きたいように生き、愛したいように愛せばいいではありませんか」と詰問したのに対する答の中に垣間見られるように思われる。「人間の心の奥には他の人間が立ち入ることので

きない領域があるのです。イエズスさまの光はそこまで届きます。他の人には見えなくても、私はイエズスさまにすべてをさらしています。露わに、むき出しにされています。それだけでいいのです。」人間の孕む本質的な矛盾に対して鋭い意識を持ち、それに引き裂かれながらも、それをそっくりそのまま絶对者に託し捧げるその岩下神父の信仰のうちのありようが、我が意ならず過酷で矛盾した人間的条件の中に投げこまれているハンセン病患者の「引き裂かれ」と「捧げ」に深い所で通い合い、支え合ったのだ。岩下神父の内なる火に輝くと同時にこちらの存在を突き抜けたところを凝視するようなあのまなざしは、自分自身の中の心の奥の「イエズスさまの光が届く」ところから、相手の中の「イエズスさまの光が届く」ところを見るそのまなざしなのだろう、と今私は思う。

岩下神父が死を覚悟して中国旅行から帰ったとき、医師の警告を無視してまで、私の帰るところはあそこしかないと言って神山復生病院に直行することを望んだのは、ハンセン病患者の「引き裂かれ」と「捧げ」の場である。ここそが、岩下神父にとって最も真理に近い場であったからだろう。そして岩下神父が、囑望されていた学者としての仕事をこの病院の仕事のために犠牲にしたのも、この病院の中に何もものにも代え難い真理との直接の出会いを見出したからだったのだろうと思う。

この「引き裂かれ」と「捧げ」は究極的には十字架上のキリストにまで連なってゆく。岩下神父の臨終の時に患者たちが歌った聖歌の言葉がそれを告げている。「神の子は人となり、われらの罪をゆるすため、十字架の死に至るまで、しのびましぬ苦しみを」

この本の最後に「わたし」が述べる言葉に耳を傾けよう。それは神山復生病院が岩下神父と患者の「引き裂かれ」と「捧げ」ゆえに逆にどのような特権的な場となりえたかを告げている。

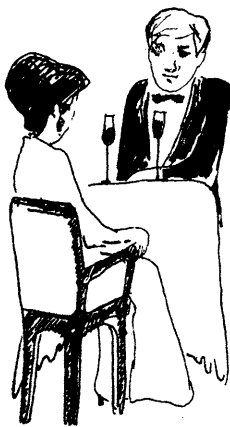
「イエズスさまがどのようなお方なのか、いまだに分りませんが、岩下神父が亡くなった直後の顔が鮮かに思い出されます。頬がこけて、ひげが伸びて、深い考えの中に沈んでいるような顔でした。あの顔がわたしの肩のところ飛びこんできて、四十五年間も離れないのです。今ではあの顔がイエズスさまなのか岩下神父なのか、重なり合ってしまった。それどころか、無惨で醜いはずのわたしの顔までが合体して、透明でかたちがなく、生命体のようなものになってしまったような気さえしてくるのです。」

(お茶の水女子大)

ふくろうのつぐやき

全体が見えるかね

真壁 伍郎



ふくろうの首は、ぐるっと回ってまうしろも見ることができんだよ。子どもたちにこんなことを話してやると、みんな首をうしろにひねっては、試してみています。やっぱりできないと、あらためてふくろうの首のめぐりと頭の回転の良さに感心しています。

「そうなんだよ、世界がまるごと見えなければね。どうだね、君には、見えるかね」。ふくろうはそうつぶやいています。なるほど、ふくろうは自分にそれができる

だけに、要求することも大きいなと思ってしまうました。まるごと世界を見ようたって、首をどうひねればよいか見当もつきません。そんなわけで、しばらくこのふくろうの言葉は、わたしの心にひっかかったままです。

そんなある日、はっと、これかと思わされたことがありました。

二年生のやす子さんが、覚えてきた詩をいかにも楽しそうに口ずさんでいます。

ソロモン・グランディ

げつように生まれ

かようにせんれい

すいようにけっこんして

もくようにびょうき

きんようにぎとく

どようにしんで

にちようにはかのなか

はいそれまでよ

ソロモン・グランディ

(マザー・グースのうた)

へえ、あなたよく覚えたね、というと、だって面白いんだもの、と答えます。

この詩にかぎりません。やす子さんは、詩がとても好きで、気に入った詩をどんだん空で覚えてしまいます

だいたい子どもたちは詩が好きです。よくわたしに覚えたい詩を口ずさんでみてくれる子どもがいます。

これほど好きならと、わたしは、ある時、ちょっと面白そうな詩をみんなに読んでやりました。

たいようがおならをしたので

ちきゅうがふつとびました

つきもふつとんだ

ほしもふつとんだ

なにもかもふつとんだ

でもうちゅうじんは

いきていたので

おそうしきをはじめた

どうだね、面白いだろう、と子どもの様子をうかがいました。でも、子どもたちは、うふっと笑うだけ。それ以上なんの反応もありません。それでおしまいでした。その後、文庫の本棚から、この本を借りてゆく子どもほとんどいません。

これは七歳の女の子の詩だそうです。この児童詩集を編んだ人は、この子を大きな詩人だとたたえていました。でも、子どもたちは、そう甘くは評価しません。

この一件、わたしたちの目は確かか、と子どもに問われてるように思いました。たしかに子どもたちは、時にわたしたち大人をはっとさせるような、それこそ詩のような言葉を吐きます。その発想と言葉の面白さは、わたしたちの常識をはずれ、これは天性の詩人かなと思わせることがあります。そのためでしょう、子どもたちの

こうした言葉をよせ集めた詩集が少なからず出ています。

でもこの点は、子どもたちのほうがずっと冷静です。子どもが子どもらしく見たり感じたりするのは、子どもにとってはごくあたりまえのこと。それを大人が、むやみにほめたり、感激したりしても、なんのことなのか、戸惑うだけのことでしょう。

なぜか、子どもの作った詩を集めた詩集よりも、いわゆる詩人たちが作った詩集のほうが子どもたちにはずっといいようです。いまでも北原白秋の詩集『からたちの花がさいたよ』が借りてゆかれ、谷川俊太郎の『ことばあそびうた』、まど・みちおの『てんぶらびりびり』、そして最近では、くどうなおこの『のはらうた』などがよく子どもたちどうしの間で手渡されています。

文庫のおじさんが、調子よく読んでやったりするせいもあるのでしょう。響きのいい言葉や、歯切れよくすかっときまった言いまわしには、どの子どもとても喜んでし

まいます。まど・みちおの「がいらいごじてん」も、ずいぶん楽しめました。

ファッション Ⅱ はつくしよん

パンタロン Ⅱ ばあだろう

ネグリジェ Ⅱ ねぐるしいぜ

マニキュア Ⅱ まぬけや

クロッカス Ⅱ ぼろっかす

トイレ Ⅱ はいれ

こんな響きを楽しめるなんて、やはり詩人のおかげです。最近、詩人たちも単なる童謡の歌詞作りから、言葉で勝負する詩の世界に心が向いてきたのでしょう。さまざまな詩の試みがなされるようになりました。ただ残念なことに、言葉の調子のよさだけをねらったものが多くということ。どれもこれも「ことば遊び」の域を出ていないのではないかと思ってしまう。描きだされ、語られる世界そのものが貧弱なのです。

たった数行の言葉のなかに、人の誕生から死までのことを、あっさりと言い切ったソロモン・グランディの詩の見事さ。やす子さん、マザーグースに引かれたのも無理はありません。こうしたたぐいの詩が、わたしたちにはまだまだ足りません。

きれいな言葉で、きれいな景色を描写すれば、もう詩になる。月の砂漠を王子と王女が旅をしているとか、菜の花畑に夕陽がさしているとか。大人の感傷の世界を情緒たっぷりにうたいさえすれば、それで詩になると、わたしたち自身が信じこんでいたふしがあります。それが子どもに向うとなると、いっそうその傾向が強調されてしまいます。「かわいい子」にふさわしい「かわいい歌」というわけです。

やす子さんにかぎらず、子どもたちが、好んで読んでいる詩を見ていると、子どもたちが求めているのは、もっとちがうのではないかと思ってしまう。おおげさな言葉でいえば、子どもたちはなにか、自分をめぐる宇宙や、自然がどんなままとまりになっているのかをつかん

でおきたいし、見てみたいのです。

星はどうして空にあんなにたくさん光っているの。風はどこからどうして吹いてくるの。どうして春になると花が咲くの。子どもたちのこんな問いにぶつかると、わたしたちはすぐに、これは科学の目覚めとばかりに、むずかしい理屈でこれを説明しようとしています。でも、子どもたちが求めているのは、そんなものではない。物や人には、それぞれに定まった場所があり、時があり、役割があった。それを目で見えるようにあきらかに示してほしいのです。

季節の変わり目や、また、天気がとてもいい時や悪い時に、わたしはよく季節の移り変わりのことを話します。

どうしてだろうね。ぜんぜん離れているのに、あそこ
の家のさくらも、向いの家のさくらも、みんなおんなじ
に咲くじゃない。一・二・三って約束して咲いてるのか
な。

決して、わたしが答えを知っていて、子どもたちの科

学的な興味を引きだすためにそういつているのではあり
ません。わたしの子どもころからの疑問をそのままい
っているだけです。これについての科学的な立派な答え
を、その後、何度聞き、そして学んだことでしょう。で
も、この不思議さについての驚きと疑問は、いまでもわ
たしにはそのまま残っています。

ドイツの子どもの詩を読んでいて、とてもいい詩に出
会いました。

ひとりのかあさんに 四人のこども

はるちゃん、なつちゃん

あぎちゃんに ふゆちゃん

はるちゃん 花をもってきて

なつちゃん クローバをもってくる

あぎちゃん ぶどうをもってきて

ふゆちゃん 雪をもってくる

季節のめぐりと、もたらされる自然の恵みがイメージ

(阪田寛夫「年めぐり」しりとりに唄)

豊かにうたわれています。むずかしい理屈で説明されなくとも、これでなんとなく納得してしまいます。それにこの詩だと、自然が太ったおっかちゃんのような気がして、とても懐しくなります。このなんでもないような詩のたぐいが、自然を愛し、つねに四季をうたうというわたしたちにはあまりないのです。すくなくとも、子どもたちのための、これといった詩がありません。

時の流れを刻む月についても同様です。ありそういで、ないのです。かろうじて、あげるとすれば、こうです。

かるた たこあげ げんきなこ
こけし しもやけ けやきのめ
めだか かげふみ みずすまし
しがつ つみくさ さくらもち

これを、イギリスの女流詩人、クリスティナ・ロセツ
ティの詩でみてみましょう。

寒い一月 荒れた空

二月はすっかり ぬれもよう

三月 風が吹きすさみ

ものかわるは やよいごろ

かわいいこえで鳥はなき

五月の花をほめ歌う

陽のよくつづく六月は

長い長い日ながどき

やけつく暑さの七月に

電光につんざかれつつ

嵐の雲がとんでいく

八月の野に五こくがみのり

九月の山に果がうれる

天氣の荒れる十月に

地は衣をぬぎすてる

星がながれて落ちるのは

寒いお空の十一月

そして夜長でその上に

寒さのますは

ちりげ冷たい十二月

（『ロセッティ童謡集』大原三八雄訳）

なんとすばらしい詩でしょう。それぞれの月による自然の移り変わりが、短いことばで端的に言い表され、口ずさみながら思わず一年の月日のめぐりを実感してしまいます。さきの詩とくらべてみると、詩の技術うんぬんよりも、見えている世界と、その奥行の深さが、もう当初からちがっているようです。

子どもにそうしたものが向かないと思うから書かないのか、それともわたしたちが一般に、自然や宇宙をうた

うことを、しち面倒くさいこととして避けているのか。フレールベルの「母とおきなごの歌」があきらかにひとつの宇宙観、世界観を意図していたことを、ここでわたしたちは思い起しておく必要があります。

宇宙観や世界観が必要なのは、大人だけではない。もちろん大人にも必要だが、それ以上に子どもたちには必要だ。幼児教育の創始者たちは、みなこのことを深く心にとめていたようです。

あのことを知っている、あれができる、これができる、こまぎれの知識や技能をどんなに集めても、まとまりある宇宙や世界は見えてきません。子どもものころから、できる、できない、知っている、知らないで追いまわされ、安心して身を横たえる宇宙の片隅すら思い浮べることができないとしたら、いったいなんのための教育があったといえるのでしょうか。

今から八百年も昔の一女性の宇宙観、世界観が、いまヨーロッパで話題になり、多くの人の関心を集めている

す。ドイツの尼僧、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンが「見た」という世界です。昨年、そのヒルデガルトの生れ育った場所を訪ねてきました。山の上の、廃墟となった修道院の小さな片隅が、彼女の思想を育んだ場所でした。連なる丘が見え、森や畑に見えかくれしつづつ川が眼下にぶく光って流れていました。空には風におくられた雲がゆっくりと通りすぎてゆきます。いまはもう草が生い茂るだけとなった彼女が寝起きしたという場所の目の前に、修道院を訪ねてくる人のための宿舎「ホスピス」が、これもまた廃墟となって残っていました。

ここで彼女は宇宙の全体像を見、人類救済の歴史を絵巻きもののように見たといえます。彼女はドイツ最初の博物学者であり女医でした。また、詩人でみずからの詩に作曲もしています。国王や聖職者が訪ねてきて教えを乞うたという、哲学、神学の学者でもあったといわれております。

幼いヒルデガルトは、この小さな場所でユッタという女性教師から教えをうけました。その教育がすばらしく

ったといえます。天と地を見はるかす場所で、創造の秩序とその業をたたえる歌を、彼女は習い、うたい始めます。世界はばらばらではない。すべてのものにそれぞれ定まった場所と役割が与えられている。宇宙も、自然も全体が一つとなって、美しいハーモニーをかなでているのだと彼女はいいます。

彼女の残した大部の著作を現代語に訳した医学史の大家、ハイデルベルク大学のシッパゲス教授にお会いしたら、こういつておられました。

「いままでわたしたちは、雑多な知識と技術を追いつめてきました。でもこれをどうまとめることができるか。これは同じ路線のなかからは出てきません。いま、わたしたちに必要なのは、全体への眺望です。これをわたしたちは、八百年前の女性、ヒルデガルトに学ぶのです」。

ヒルデガルトが、幼い時、身をもって「全体への眺望」を与えられたように、いまわたしたちのまわりの子どもたちも、本当はそれを一番求めているのかもしれないま

せん。わたしたち大人がもっているという宇宙観、世界観もそのおおよそのスケッチは、どうみても、子どもどころに与えられた「絵」以上に出ていないように思います。これはわたしひとりの思いでしょうか。

ふくろうのいうことがよく分かりました。宇宙や世界が一枚の「絵」になって見えているかどうかということでした。その絵をもつてわたしたちは生きていくことになります。後にいろいろなことを習ったり覚えたりしますが、それは初めの絵を変えるほどのものではありません。ですから問題は、その絵がほんとうに慰めや、安らぎに満ちたものになっているかどうかです。

いい詩ってどんな詩？ それに答えるすてきな詩があります。

Keep a poem in your pocket
and a picture in your head
and you'll never feel lonely

at night when you're in bed.

The little poem will sing to you
the little picture bring to you
a dozen dreams to dance to you
at night when you're in bed.

So —

keep a picture in your pocket
and a poem in your head
and you'll never feel lonely
at night when you're in bed.

もつててごらん ポケットのなかに
小さな 小さな 詩をひとつ
あたまのなかに 絵をひとつ
そうすりゃ ぜったい なびしくない
ベッドのなかで よるねるよきみ

その詩が あなたに うたいかけ

その絵が ゆめを もつてくる

たのしい おどりを おどれるように

ベッドのなかで よるねるときも

ね、だから

もつてごらん ポケットのなかに

小さな 小さな 絵をひとつ

あたまのなかに 詩をひとつ

そうすりゃ ぜったい さびしくない

ベッドのなかで よるねるときも

(ベアトリス・ド・レニエ)

たぐさんの本を著し、現代を代表する神学者といわれたカール・バルトは、亡くなるときまで、子どもたちの歌を喜んでうたいつづけたといえます。羊飼が迷った一匹の小羊をさがし、とうとう見つけて、連れ帰ったと

いう内容の歌です。これが、彼を支えた「絵」であり「詩」でした。さて、わたしたちはいま、どんな絵や詩をもつて、今日を生きているのでしょうか。

(新潟医療短大)

ゆうびんやさん

おとしもの



國吉 栄

昨年は、子どもたちとずい分たくさん縄とびをした。朝、誰かしらが、「ゆうびんやさんやって」と言いにくる。「いいわよ、先に縄を用意しておいてね」「はい！」。子どもは走って棚の上のカゴから縄を二本とり出してつなげ、一方の端をどこか動かないものに結んで「せんせー、できたよー」と呼ぶ。もう一方の端を私が握ると、子どもは待ちかねたように縄の結び目付近に立つ。「ゆうびん

やさん、おとしもの、ひろってあげましょ、一まい、二まい、三まい……」。『いれて』『いれて』とたちまち数人の子供が並ぶ。こうして何日、何回、縄を回したことだらう。『このところずっと“ゆうびんやさん”の縄回しを一時間近くやっているが、こんな単純なことが結構おもしろい』と、十二月初めの保育記録に書いてある。毎日縄を回し続けるのは確かにくたびれることではあったけ

れど、今振り返っても、あれは本当におもしろかった。縄を回すという単純な繰り返しの中で、たくさんの子どもたちと親しく出会うことができたからである。

縄とびをしている時、子どもたちは、どうしてこんなに一心に、誇らし気に跳ぶのだろうか。地面からほんの何センチか跳び上がっただけに、驚くほど普段と違っている。「ゆうびんやさん、おとしもの」と、波が左右に動いている間は比較的気軽に跳んでいるが、「一まい、二まい」と縄をぐるっと回す直前になると、急に顔が引きしまり、「さあくるぞ」という感じで身構える。そして一心不乱に跳び始める。トントントン。規則正しいリズムに乗って、別の世界に入ってしまったようだ。グルグル回る縄を跳ぶ時、ほとんどの子どもたちは、回し手である私の目をヒ

タと見つめている。私の目の中に次に来る波を見ているのだろうか。彼ら自身を託しているような透明な目だ。グルリとめぐる縄の内側は、彼らの小宇宙なのかもしれない。「ごおまい、ろくまい……」と傍らで数える子どもたちの声が、「呪文」のように、めぐる宇宙の外側に薄い膜をつくっている。回し手である私も別世界に移されてしまったようだ。冬休みに子どもからクリスマスカードが送られてきた。「クリスマスおめでとう。ゆうびんやさんののしかったです」。そう、本当に楽しかったわね。

外側で見ている子どもたちにとって、縄のめぐりを自由に跳び越える友だちの姿は、信じられないほどのあこがれを誘うものらしい。たくさんの子どもたちが、それぞれの関わり方で、縄とびのそばにやって来た。そば

に来て私の手を握って見ているだけの子ども。その子と手をつないで縄を回しつつ、波の動きに合わせて一緒にポンポン跳びあがると、キャッキャッと声をあげて笑う。「電車が通ります」と言っ、わざわざ縄の下をぐりに来る子どもがいる。何日もやりたそうにそばで見っていた末、「Kちゃんがやりたいって」、と他の子を連れて来た子どももいる。「そう、Mちゃんもやる？」と聞くと、「うん」と言っ、安心してように並ぶ。縄とびが全く初めてでも列に並ぶ子ども。跳べるようになってからでない、皆の前でやろうとしない子ども。みんなそれぞれに、あこがれの世界に関わりを持ちたくてやって来るのだ。

年賀状が来た。その一通に、「またいっしょになわとびをしてください」とあった。私は胸をつかれた。この子とはまだ一度も一緒に

に縄とびをしたことがなかったからである。そばで見っていたという記憶もない。その子が「またいっしょになわとびをしてください」と書いてきた。彼女は二学期の半ば過ぎから遊びが変化し、一人で何かを作っていることが多く、私も気になっていた。一人で箱をつなげながら縄とびを見ていたのだろうか。心の中で、自分も一緒に跳んでいたのだろうか。彼女のその頃の様子を思っ、心穏やかではなかった。

冬休みが明け保育が始まったが、何日待っても彼女は縄とびをしに来なかったし、そばにも来なかった。けれどもある日、とうとう、「なわとびしたい」とやって来た。「いいわよ、後ろに並んでね」。ドキドキする気持ちを抑えて迎える。彼女の番になった。回さないで左右にゆっくりと波をつくるのだが、なかなかうまく跳べない。必死で下を向いて

縄の動きを見ている。「下を見ないで、先生の目を見て跳んでごらん」。すると彼女は真面からくいいるように私の目を見て跳び始めた。ひざもゆるめず、腕もまっすぐに伸ばして、直立の姿勢でトントントン跳んだ。少し早いかな、と思ったが途中で縄をグルッと回してみた。一瞬びっくりしたようだが、彼女はそれこそ機関銃のようにトントントントンと早い速度で跳び始めた。回す方もそれに合わせてグイグイ早くなる。高速で車を走らせているような緊張感。ほんの少しでもリズムが狂ったらおしまいである。ところが、一途に真剣な目が、気がつくとき少し笑っている。よかった。彼女は何度も並び直して、その日のうちに跳べるようになってしまった。

それから数日は、登園すると必ず朝一番に、「せんせい、なわとびやりたい」と言いに来た。そしていつの間にか縄とびの列から

離れ、入園の頃のように庭に出て、他の子どもに交じって砂遊びやボール遊びをする姿が見られるようになった。あの子の問題が何であつたのかよくわからないけれど、縄とびの宇宙をくぐりぬけて、それを跳び越えていったことはわかつた。

このような劇的な縄とびはもちろんだが、もっと気楽にのんびりと、全く跳べない子が跳べるようになるのに付き合うのは、別の楽しさがある。四歳児のTはもう何度も挑戦しているが、まだうまくいかない。波に身体を平行に向けて跳ぶことができず、跳んだ後、二歩、三歩、ツツツと前進してしまふ。一回一回、障害物を跳び越えるように跳ぶ。赤ちゃんの歩き始めのようにTは決してあきらめない。挫折しない。

赤ちゃんは床に水平になって、大きな子どもたちが垂直に自由に動き回っているのをど

んなにあこがれて長い時間見つめていたこと
だろう。だから、時が来ると敢然と立ち上
がる。ころんでも飽かず立とうとし、そして歩
き出す。縄を前に奮闘しているTも、いよいよ
あこがれの『跳ぶ世界』に挑戦してきた。

大人である私は、彼女が早晩、苦もなく跳べ
るようになることを知っているから、彼女が
新しい世界に踏み出そうとする場に参加でき
ることがただうれい。目の前で『歴史』が
作られているような気がする。

おそらく子どもたちも、そう感じているの
ではないだろうか。Tの動きに合わせて「い
ーち、にーい」とゆっくりかぞえながら、子
どもたちはTの中に少し前の自分たちの姿を
見、励ます私の声に、かつて自分も同じよう
に声をかけられたことを思い出して、彼女の
努力に共感しているように思える。Tがへと
へとになって終わると、「とべたね」と迎え

ている。縄とびは舞台のようだと思う。舞台
上の跳び手と、舞台作りの回し手と、観客で
ある数え手と、お互いに共感している舞台で
ある。

何かが出来るようになることは本当に素晴
らしいことだと思う。子どもたちに喜びを与
え、束縛から解き放つ。けれども「出来るこ
と」自体が目標になる時、楽しさは失われ、
縄とびは、「出来る者」と「出来ない者」を
峻別する道具になる。「わたし、できるよう
になったから、もうやらない」と言った女兒
の言葉が印象に残る。

また、「出来ること」そのもので、自分の
存在を認めてほしいと思うと、遊びは悲愴な
ものとなる。保育参観の時、「ママー、見て
見て！」と叫びながら跳び続けた女兒のこと
を思い出す。彼女は母親が帰った後、おそら

く力尽きたのであろう、おもらしをしてしまった。「何かが出来ること」「誰よりもよく出来ること」「あなたのためにこんなにかんばること」、そのことにしがみつかねば生きられない時、子どもは限界を超えてしまう。友だちと大人とが支えてくれる自分の宇宙に、自分の意思で、自分のテンポで、リズムをきざんでいくことの大切さを、縄とびの遊びが教えてくれたように思う。

請われるままに縄を回していると、心迷う時がある。順を待つ列が長くなると、大切な遊びの時間にこんなことをしているのだからかと思う。あの子は他にすることが見つからなくて、何となくここに並んでいるように思える方がいいのだろうか。自分が「縄回し機」になつたような気持ちになる時もある。しかし私はやはり急いではならないと思う。この、のんびりとした世界の中に動いているも

のがある。思いがけずいいねいにつき合うことになつた遊びの中にも、やはり保育の世界は開かれている。保育は相互に関与し合う「応答の世界」だと思ふから、性急に答えを出せるはずもないのだ。

一人の子どもが縄とびの最中、ポケットからティッシュペーパーを落とした。「Oちゃん、ティッシュ落としたわよ」と呼びとめると、他の子どもが言った。「せんせい、ゆうびんやさん、おとしもの、っていえばいいんだよ」「そうね、はい、ゆうびんやさん、おとしもの」。そばにいた子どもたちも一緒に笑った。

(立教女学院短期大学
附属愛児研究所天使園)

兔園隨筆

手

「せっせっせーのよいよいよい
アルプスイちまんじゃく……」

力のある手

やさしい手

厚い手

薄い手

蕪木寿江

「ジャンケンポン

あいこでしょ……」

大きな手

小さい手

丸い手

細い手

つないだ手

にぎった手

あの子の手

この子の手

一人、一人ちがう手のぬくもり

ひとり、ひとり

ちがう

手の

ぬくもり――。

偶然は愛か

「あら、偶然ですね」とか

「全く、偶然なのよ」とか

人はよく話します

一生懸命生きていると

度々この偶然に出会えるような気がします

偶然は神のようにも見えますし

人の心のようにも思えます

これからも生きていくうえに

又、何度か「偶然」に出会うでしょう

そのたびに、生きている喜びを思うでしょう

こんな喜びを「偶然」と呼びたいのです

(市が尾幼稚園)

子どもの会話（その一）

無藤 隆

幼児は回りの人々どのようなやり取りをしているのだろうか。子どもは人とのやり取りの中からいろいろなことを学び、発達していく。だから、他の人とのやり取りを分析することは、子どもの発達を考える上で多くの示唆を与えてくれるに違いない。

幼稚園での教育を考える上でも、子どものやり取りに注目することは大事なことだ。教育の一つの核は、子どもにとっての回りの人々である先生や子どもが働きかけることだからである。大人である我々は、教育的営みである子どもへの働きかけを反省するために、自らがしている子どもとの会話を再検討してみてもよからう。

本稿では、具体的な会話の例を挙げて、考察していきたい。それが分かりやすいし、実態に迫ることもなると思うと共に、やり取りの場での動きを離れて真実などはないと思うからである。具体的な例をどこまで分析できるか我々の学問の勝負所だと思ふのである。読者の方々もその分析に参加して、私の分析がどこまで納得がいくか、別な分析の可能性はないかどうか考えていただ

ければと願う。私が常日頃学生に言っているように、ある日、ある時、ある子どもが行った会話の断片を、シェイクスピアの作品のように豊かなものとして検討する・出来ることが理想なのである。

ここで、やり取りと言ひ、会話と言っているが、それは要するに、人と人とのやりとりを「意味」の構築の過程と見て、その細かい動き―言葉も身振りも状況も含めて―から成り立つものを指している。言葉は極めて大事な役を果しているが、決してそれが全てではなく、その場に存在するもの、存在しなくても影響している全てのものを含んでいることに注意して欲しい。以下の例を挙げるときは、主に発話を示すが、これは多分に表記上の便宜的な理由による。研究としては、観察者

である我々が会話を理解する上で、どのような知識が必要なのか、その知識を一般的な会話の枠組みとして整理することが眼目となる。

なお、これから挙げていく会話例は、全て私の研究室で組織的に収集してきたものである。家庭や幼稚園でビ



デオにより撮影し、その発話や主な身振り、状況を文字に直し、一定の観点で分析、考察している。観察特にビデオ観察の利点や限界については、別稿を参照して欲しい。(無藤他編著「子ども時代を豊かに」学文社。)

一 母と子の会話

まず、母と子のやり取りを見てみたい。母とのやり取りが子どもの成長にとって重要であることは言うまでもないが、さらに、幼児の教育にとってのいろいろな示唆もここから得られる。母親は子どもに対して、必ずしも意識はしていないにしても、微妙な形で発達を助け、教えているのである。

母と子は様々な会話を互いに交わしている。一つの会話を取っても、そこには多くの側面がある。以下に取り上げるものは、そのごく一部に過ぎないが、母子の会話の豊かさと子どもの発達にとって持つ意義深さはかいま見られるに違いない。

例一 二歳の子どもとその母との会話

母1 はい、どうぞ。(茶碗を渡す。)

子1 (茶碗を受け取り、食べる真似。)

母2 おいしい?

子2 (茶碗を差し出す。) はい。

母3 (茶碗を受け取る。)

おいしかった?

かずみちゃん、おいしかった?

(中略)

母4 (茶碗に何かをよそう真似。)

おかわりどうぞ。(茶碗を差し出す。)

子3 はい。(茶碗を受け取り、食べる真似。)

母5 ご飯、おいしい?

子4 (茶碗を差し出す。) はい。

母6 うん。(茶碗を受け取る。)

(中略)

母7 ちょっと待っててください。

(フライパンで何かを作り、茶碗に入れる真似を)

して、差し出す。)

はーい。おかわり。

子5 はーい。(茶碗を受け取る。)

この例では、母と子が一緒にままごと遊びをしている。母1から母3まででご飯を食べている。母4から母6までではおかわりをしている。母7と子5とでフライパンで作ったものを食べることに変わっている。

ところが、よく見ると、子どものしていることは、茶碗を受け取り、食べる真似をし、また渡すという定型の繰り返しである。母が、ご飯、おかわり、おいしい、おかず等の流れを与え、膨らましている。

例二 四歳と二歳とその母の会話

〔場面1〕

姉1 ちいちゃん(自分のこと)、ごはーん。

(茶碗を母に差し出す。)

母1 (妹を膝の上に乗せている。)

(妹の手を取って、姉から茶碗を受け取り、ご飯をよそう真似をする。)

はーい、今ご飯、上げますよーって。

妹1 んーよ。

姉2 早くご飯ください。

(箸で皿を叩く。)

母2 (姉に茶碗を渡す。)

はい、どうぞって。

ここで、母親は姉と妹の間に立って、ままごと遊びを展開している。母1、母2の発話のいずれも妹の代わりに発言しているもので、同時に、妹にままごとでのある言い方を教えてもいる。その教え方は、ままごとを現実に進める中で、発話の内容に見合った身振りをしながらである。妹は「んーよ」と、「上げますよ」を真似しており、親の手本を取り入れつつある。姉の方は、ままごとの中に明瞭に役を持って参加しており、ご飯をもらうのに、母に習って「下さい」という言い方に直してい

る。

「場面2」(場面1の続き)

妹1 (茶碗をつついている。)

母1 かずみちゃん(妹のこと)、何作っているの？

姉1 かずみちゃん……かずみちゃん……かずみちゃん

はパーパ！

母2 パパ？

姉2 うん。

母3 ちいちゃんは？

姉3 ちいちゃんはお母さん。

母4 ちいちゃんはお母さん？

姉4 うん。ママは……ママは……ママは、ママのお母

さん！

母は、妹の動作を見て、ままごとの中の動作として解釈を与えようとする。それは成功しないが、姉が、妹を父親役に見立て、ままごとに組み込む。おそらく妹は了

解していないが。母は、姉にその役を問うことで展開を

計る。姉は、妹に役を振る前からそのつもりだったかもしれないが、あるいは、母の問いに促されて、自らを母親の役とする。そこで、母に、改めて繰り返されることで、おそらく、現実の母親(「ママ」)の存在と矛盾を感じたのではないか。このままでは、母親が二人いることになってしまう。ここで、空想と現実とが混同されている。しかし、少しためらった後に、姉は、母に祖母の役を振ることで解決する。これは多分、現実の人間関係(母とその母つまり祖母)によっている。

続いて、

「場面3」

姉1 はい、パーパ。お茶ですよ。どうぞ。

(妹に茶碗を渡す。)

妹1 (姉を見て笑う。)

母1 うわっ、いいな。ママもお茶欲しいなー。

姉2 はい。待っててくださいーい。

(急須からお茶を注ぐ真似をして、母に渡す。)

母2 (飲む真似。) うわー、おいしいな。

ね、かずみちゃん、おいしいね。

姉は早速、妹にごっこをする。妹は分かっているかどうか、ともかく笑う。母は妹がお茶をもらって喜んでいると解釈を与え、共感を表し、ごっこの中で欲しがる。お茶を注いでもらい、母はさらに、表情豊かに、妹を巻き込む。

【まとめ】

親は、小さい子どもと様々な会話をして楽しんでいる。子どももまた、親との会話を楽しんでいる。まずは、一緒に何かをし、共有すること、意志が通じていると感じられることが大事なのである。そのために、親は、子どもが出来る所はやらせ、出来そうもない所はどんどんやってやり、しかし、子どもがやっているかのようにはしばしば振舞う。まるで、親は、子どものいる二次

元の世界を三次元の世界に拡大しているようだ。その三次元の世界には、子どもの意図、気持ち、空想の役柄や演技が含まれている。親は、子どもの発達の拡大者としての役を結果的に果しているのである。

(お茶の水女子大)

「錦にしきの中の仙女」

近藤伊津子・編

このお話は、近藤伊津子さんが台湾を訪問された際、「中国童話」の編集長呉さんの許可を得て収集されたものです。古くから台湾に伝わるお話ばかりです。今後、少しずつ紹介していく予定です。が、日本の民話との違い等味わいながらお読みいただきたいと思えます。

中国の西南地方（雲南省）では、むかしから錦織の名産地として名高く、「僮錦トンチン」と呼ばれていました。

むかし、この村に錦織の名人の羅らのおっかさんがいました。早くに夫に死なれ、息子の羅ら洛らくと住んでいました。ヤセ地の村は獲れる物もなく、羅のおっかさんは機はた仕事をし、息

子は樵きざりをしてくらしていました。

ある日、村に乞食の婆さんがきましたが、村人の家ではどこも戸さえ開けずに追い払いしました。

ところが息子の羅洛ろらくがわずかばかりのかゆを恵み与えると、乞食婆さんはすすり込み、口を拭くと、「若者よ、この一卷の絵をお前、お前のおっかさんに進ぜよう。この絵の通りに錦を織ったならば、お前たちには運がむいて来るじゃろうよ」と言うと、懐から巻絵をとり出しました。

息子の羅洛ろらくは家に持ち帰ってひろげてみると、あまりに美事な風景なので、二人ともしばらくは息がつかないほどでした。山や川はもろろんのこと、どこまでも広がる田や畑、たわわに実をつけた木々、その中にたたずむ家。

羅のおっかさんは、「ああ、こんなところに住めたら、どんなによかろうか……。この稲穂はたっぷりとしていて、さぞうまい飯が炊けるだろうて」といって深い嘆息なげいきをつきましたが、すぐにこの風景を、そっくり錦に織り上げてみようと決心したのです。

さあ、それからというもの、羅のおっかさんは、寝食しんじきも忘れ、明けても暮れても織機の前に座りつきりでした。パターンコトン、パターンコトンと織音が響き、一年が過ぎ、二年が過ぎました。二人のくらしむきは前より一層苦しくなり、その上、羅のおっかさんは目を悪くしてしまい、ほとんど見えない位になりました。

羅のおっかさんの織る錦は、あ、巻絵の中の青い山、黄色こがねの稲穂、うれた赤い果実くだものがそ

つくりに織込まれていて、いいえもしかしたら、巻絵より、もっと美しかったといつてもいいほどでした。

又、羅のおっかさんは、巻絵にないものも織り込みました。家の前の草原に、自分が息子がうれしそうに笑って立ち、池の辺りには、ほっそりとした若い娘を織り込んだのでした。息子の羅洛はきつと、こんな嫁をもらうに違いないと思つてのことでしたが、ただ、その顔の目鼻立ちはどうにもならなくて、織込むことが出来ませんでした。

その日、赤くなつた目をしばたかせながら、「息子や、おっかさんの目は、もう、いよいよ見えなくなつてしまつたよ。家の外で、おてんとさまの下でなら見えるかもしれないので、織機と巻絵を運んでおくれ」といいました。

息子の羅洛は、おっかさんの頼み通りに外に運び出しましたが、そうするやいなや、シユウと怪しげな一陣の風が、織りかけの錦を空中高く吹き飛ばしてしまいました。

羅のおっかさんは、この突然の出来事に氣を失わんばかりになりましたが、息子の羅洛に、どんなにしても織りかけの錦布を探して来てくれるよう頼みました。

息子の羅洛は錦布が飛んでいった方向をめざして、走りに走りました。けれどもどこまで走つても見つけられず、茫然としてみると、そこに老婆が、どこからともなく現われ、錦布を探しているのかたずねました。

そして老婆は懐から一振りの剣と一幅の黒馬の絵と、黄金の塊りを十個取り出し、言いました。

「お前の探している錦は北海の仙女に取られたのじゃ。仙女たちは錦の美しさに心を引かれ、自分たちもそっくりに織ってみたのじゃよ。」

もし、お前がどうしても取りもしに行くのならば、まずこの剣で指を切り、血をこの絵の黒馬の目に落とすのじゃ。するとな、この馬はお前を仙女の住むところへ連れていくじやろう。

だが、うまく取もどせるかどうかはわからん。それでじゃ、行くのを諦めて、このまま帰るのなら、この黄金は、そっくりお前の手に残るといふものじゃ。どちらにするかね。お前が決めるのじゃ」

老婆が言い終らぬ内に、息子の羅洛は、剣で指を切り、黒馬の目に落しました。

黒馬はたちまち絵から抜け出て、羅洛をのせ、北の方へと飛び立ちました。

しばらく飛び続けて、初めに着いたところは、燃えさかる火焰山^{カエンザン}。たちまち羅洛の髪も眉もこげてしまいましたが、ひるみませんでした。火焰山を過ぎると、氷の海に着きました。その寒さと冷めたさは気を失いそうでしたが、羅洛は耐えました。

こうした千辛万苦の果てに、やっと仙女の住む北海の島にたどりつきました。

仙女の島は百の花が咲きみだれ、小鳥がさえずり、陽がさんさんとさしていました。

黒馬の羅洛は、竹林に入り、とある屋敷の前にとまりました。

家の中では四・五人の仙女たちが、羅のおっかさんの錦布を見ながら、錦織りをしていました。そして、家に入って来た羅洛を見つけると、手を休めました。中でも一番年か

さの仙女がこういいました。

「やっぱり探し出しましたね。お前のおっかさんの錦が余りに美しく織られているので、いたずらの妹が取ってきてしまったのですよ。許して下さい」

年のいかない仙女が赤くなってうつつむいているのを見て、そのかわいらしさにうっとりしました。

「今晚、一晩だけ持して下さい。もうすぐ織ってしまえそうなので。」

大仙女はそう頼むと、めずらしい果実やごちそうを出し、羅洛をもてなしました。

羅洛はいつしか眠り込んでしまい、ふと目をさましたところ、一人の仙女が機の前に座り、独言をつぶやいているのが耳に入りました。

「どうしても、こんなにはうまく織れない。牛や羊の毛の光り、稲穂の黄金色、そして清々しい空気……。私には織れない。これを織った羅のおっかさんは巻絵の絵だけでなく、自分の夢もこの中に織りこんだ……。きっとそのために、このように美しいに違いない……。私もこんなところに住みたい。そうそう、この錦の中の娘の顔には、まだ目鼻が織っていない。私の顔を織っておこう……」

やがてその仙女は織り終ると、そっと眠ったふりをして羅洛の前に置きました。

羅洛は返してもらった錦布を懐にしまい、再び黒馬に乗り、竹林を抜け、水の海、火焰山をくぐり抜け、やっと家にたどり着きました。

大喜びのおっかさんは錦布をひろげて見て、「羅洛や、羅洛や、この娘は、お前の嫁だ

よ！どうしても今までこの顔は織れなかったのに。今、わかったよ！」と叫びました。

その時です。匂ぐわしい香りの風があたりに吹き込んできました。それと同時に、羅のおっかさんの錦は、しっしっ、すっすっ……とどこまでも広がり、またたく間に、以前の石ころばかりの土やかれた木々が姿を消し、錦の絵そのものの景色となっていきました。軒の傾きかけた家も、すっかりした家になっていました。そして、池の辺りには若い娘がいるではありませんか。娘は羅のおっかさんと羅洛の方へ近づきながら言いました。

「私は羅のおっかさんの錦を持って帰ってしまった仙女です。この山や水は天からの贈りものです。そして、私は、自分の顔を錦の中に織った縁で、羅のお嫁になります。」

羅洛と羅のおっかさんは、花のような仙女と手をたずさえて、この美しい桃源境に入っていく、ゆったりとくらししました。

若いお母さんたちへ

“友だち” ってすばらしい

はるにれの会

川上美子



一、保育園へ

(1)はじめに

昨年の七月、長男Tが三才七ヶ月、次男Hが一才一ヶ月の時、私はまた保育園でお手伝いすることに決めた。Hの出産と育児で現場を離れていたが、以前かかわっていた障害を持った子ども達をみてくれる人がいなくなり、私は現場に復帰することにした。四月の時点で、私はTを集団の中に入れた方がいいのかさんざん考えた末、Tの「ママと離れるのが寂しい」「ようち園はいや、おうち園がいい」という発言が決め手となり、一年見送ることにした。ところが事態が変わり、私は二人の子どもを連れて、同じ保育園で私は半日、子ども達は一日すごすことにな

った。

今回は、Tが七月から翌年三月まで、どのように歩んでいったのか、特に友だち関係に焦点を当てて辿ってみたいと思う。

(2) 先生と泥んこ

Tのファミリー(三、四、五才の縦割のクラス)が決まってから、Tは保育園に行きたくないという日が続いた。私は別のファミリーにすることが多いが、私がいなくなると泣くこともあった。自動車が気に入ってよく乗っていたが、あまり楽しそうでもない。

七月二十八日

担任のS先生に誘われて泥んこや泥水で遊ぶ。先生が一对一ではじめてじっくり泥で遊んで下さった。時おり私のことを思い出し、「ママ ママ」と言うが、それ程気にしてやるようには思えないと後で言われた。この日食事をみんな食べ、空っぽになったお弁当箱を私に見せに来た。

(3) 裸足になって 八月七日

多くの子ども達が園庭で裸になってボディペンティングをしている。何回か先生に誘われるがやらないで、いつもの自動車に乗っている。しかしみんなが遊び終る頃、Tは自動車に水をかけ始める。そして、裸足になって泥水の中に入っている。食後女兒と遊ぶ。みんながワ―と遊んでいる所には入れないが、終り頃になると自分から遊び出す。裸足になり、泥水に触れ、心が解放される。そうすると、友だちとの心のパイプも通じ合う。

(4) 「いないで」 八月十二日

登園すると私はすぐ用事でTと離れた。Tは私を捜したそうだが、そのうち他児と話し始めたとのこと。食事の時間になり、私の用がありTの部屋に入る。席についていたTは私に「いないで」と言う。昼食もみんな食べ、さっそく車に乗っている。私が帰りのお迎えに行く時、「まだ遊ぶ」と言う。

保育園が楽しくなってきたようだ。私に「いないで」と言ったのは、私と一緒にいる時の自分、母親の知っている自分とはちがう、新しい自分を見出ししているから

である。それは、母親から離れて友だちと過ごす自分である。

二、はじめての友だち

九月になると、保育園がまた楽しくなってきた。同じファミリーで同年令のK君と気が合うのかよくK君と一緒にいた。そして、私にK君のこと（たとえば歯がどうなってるのか等）をよく尋ねる。また朝登園するとすぐK君の靴箱の中に靴があるかどうか確かめる。

十月の運動会に向けて練習が始まると、他のクラスの子ども達と交わることも多くなり、K君のみならずいろんな子ども達のことを私に尋ねる。Tにとって、友だちと一緒にいること、一緒に生活することが楽しいようだ。また固定遊具で複数の子ども達と遊ぶことができるようになった。たとえばブランコを電車に見立てたり、子ども同志で運転手や車掌になったりし、何日も遊びが続いた。障害を持った子どももブランコが好きで、私もよくT達と遊んだ。Tは電車に関心が強いので、得意に

なって遊んだ。

私が少し新しいことを遊びの中で出すと、子どもはそれを受けて動く。何回も同じようなメンバーで遊ぶうち、保育者が先に出したものを自分のものとし、さらに自分達で工夫してより楽しくより豊かな表現をしていく。共通のイメージで支えられつつ、新たな展開が子ども達の中からなされていく時、子ども達は実に愉快である。

家では私の言うことを納得して聞けるようになった。弟に対してもやさしく接するようになった。十分に保育園で遊ぶことができ、その体験が心の満足をもたらしているのだろう。

十一月になると、TはK君にびったりくっついて同じようにふるまうようになった。同じものを食べ、同じ様に服を脱ぎ、二人は楽しそうだった。私は友だちがこんなにもすばらしいものなのか、目のあたりに知らされた。同年令ではK君のみならず三、四人の男児と、また縦割りということもあり、一つ年上の男児とも遊ぶよう

になった。

三、新しい友だち関係

(1)ぶつかり合い

一月五日

○冬休み後をはじめ保育園へ行く。登園したTは、K君に出会い「僕ね、鴨川シーワールドに……」と何回も何回も話しかける。しかし、すでに他児と遊んでいるK君はうるさそうに無視する。TはK君に相手にされず、しょんぼりする。私はそばにいて、かわいそうに思えた。

一月二十二日

○K君もTも円形ドッジボールをしていて、二人とも当てられ、テラスにすわる。TがK君の隣にすわると、「おまえの隣にすわりたくないんだよ」と言われる。

○Tは同じ年令のN君とK君たちといすを使って遊んでいた。いすをめぐるトラブルが生じ、Tは大声で泣く。三才児担当のF先生は、Tの味方になって、Nに言

い聞かせられた。しかし、Nの気持は受け入れられず、その後NはTに、「もう遊んでやんない」と不満をぶつけていた。

一月二十三日 (連絡ノート S先生記)

○朝は一緒に円形ドッジボールをしました。初めはK君の側についていたが、何か二人の中であつたらしく、TがK君の髪の毛を引張ってキーキー言い、二人の関係はここでプツンと切れました。

このように三学期に入ると、友だちから拒否されたり、ぶつかり合いが目立ってきた。二学期のうちは、友だちと関係が切れてしまうようなぶつかり合いはなかった。一緒にいること、遊ぶことの楽しさが生活全体を包んでいた。三学期になり、友だち関係が変化してきた。K君も、ただTとくっついていてただけではもの足りなくなつたのだろう。

Tの体調が悪いこともあったが、友だちとうまく遊べない時、保育中私の所へ来たりした。また、Tより年上だが、体は小さいS君の後を追っかけまわし、S君とも

あまりいい遊びをしていなかった。

Tは友だちがどんなにすばらしいか体験した後、今度はうまく遊べなくなり、どんな気持ちを抱いたことだらう。しかし、友だちとうまくいく時も、いかない時も、Tの成長にとって貴重な過程だと思う。自分で乗り越えていってほしいと願う日々だった。朝離れる時にやんちゃを言うこともあったが、それでも楽しく保育園に通い続けたことは、幸いだった。週二回モンテソリー教育を受けている。自分にふさわしい課題に集中して取りくみ、やりとげた時の満足感は、Tの心に安定と自信をもたらしたと思う。

(2) 新しい友だちの模索

今までよく遊んでいた男児とうまく遊べなくなると、Tはちがう友だちとちがう遊びをするようになった。気持のおだやかな女兒達とおうちごっこをしたり、砂で料理を作ったりしてよく遊んだ。お家のイメージというか、安定した暖かい雰囲気に含まれ、Tの心も和んだことだらう。

また一つ年上の男児にまじっていることもあった。広告の紙を細く巻いて剣を作ってもらった。この剣は、三才以上の子どもたちによくはやった。細く固い剣を競って作っていた。Tは自分で作れず、作ってもらう。Tはそれを使って遊ぶというより、それを自分も持つことで、仲間意識を覚えていたと思う。また、広告の紙を三角にぶ厚く折り、鉄砲を作ってもらう。それを大切に家に持ち帰り、大事にそばに置いて遊んでいた。鉄砲もふえていき、三個までになり、古いのは角がすり切れる程になった。三学期も半ばに入ると、遊びのグループも大きくなり、年上の男児の中に、三才児が加わっていた。その中でK君と交わって遊ぶ姿が見受けられた。

さて、この間ファミリーのS先生は、よく見守って下さった。直接遊びの中に入って指導するということはさらなかった。しかし、Tが今どんな状態にあるのか、よく把握して下さった。Tはこの時期に先生に、家の中のこと、家での出来事をよく話していたようだ。そして話し方が、お兄ちゃんぽくなったとノートに書いて

下さった。先生に聞いてもらうことが、やはりTの心の支えになっていたのだと思う。

(3)家では 二月二十三日

咳が出て体調も悪かったのだが、自分の作った積木が、何かの拍子で人が当たってこわれると、Tはギャンギャン泣く。あまりひどく手の下しようがなかった。私は勘忍袋の緒が切れ、Tを外(庭)に出した。Tはまず泣いて、庭から玄関に回り、ちょうどカギが開いていたので裸足で入ってきた。この大泣きは、のどにはよかったのか、すっきりしたようだった。

寝る時、何日も片付けなかった線路をあっさりみんな片付ける。自分の着た洋服もきちんとたたんで寝た。

三学期は、持病の喘息の咳が出る日が何日かあった。咳が出ると落ち着かず、気持ちがいらいらする。ついつい甘えやんちゃが出てくる。発作は精神的な影響も大きい。大丈夫だと自分で自信があると、咳が出ていても頑張れる。しかし、心が不安定だと発作は長引いてしまう。Tは以前に比べ精神的にも体力的にも強くなり、発

作は早く納まるようになった。この日は、積木が少しこわされただけで、あまりひどく泣きわめくので、外に出すことになってしまった。

このことは適切だったかどうか、もっとおおらかに接した方がよかったのか、私には自信がない。しかし、叱られ大泣きしたら、のどのつかえが取れ、自分でもどうしようもない思いからふっきれたようだ。この時期、自分が組み立てた積木や線路を人がこわすとひどくいやがった。そして、自分では直さず、必ず私に直させる。線路を組み立て、電車を走らせる遊びは、もうずっと続いている。作り上げられた空間はTの犯されざる世界である。だから、片付けることがいやで、何日も置いたままである。しかしこの日は、自分から片付けた。

Tは朝起きると、Tの寝床から私はだっこして居間に連れてくる。それからお手洗まで一緒に付いていく。これを私がないと一日がスムーズに出発しない。この他にも、日常生活の中で、自分がこうだと決めたことがくつがえされると、ひどくいやがる事柄がいくつがある。

一日のうちで一度も泣かない日はなかったと思う。

しかし一方で体力はつき、体も大きくなった。自分で言い出したことだが、自分の自転車で教会（保育園）へ十五分位かかっても頑張ってこいで行った。

このようにこの時期は、さまざまなこと混然とし、心の揺れ動くことが多かった。

(4)新しい友だち関係へ

○長方形の広告紙を折って三角にすることを思いつく。それをたくさん作った。Tはそれをハンドルに見立て、回転させながら園内をひとりで走りまわっている。家でもたくさん作った。作って遊ぶことも楽しいようだが、ひとりで遊びながら、友だちと遊ぶきっかけを捜しているようだ。友だちとうまく遊べると、ずっと持ち続けたそれを手放しても平気になる。

○三月九日

S先生に、「T「L君が入れてくれない」とはじめて言いに来る。

○三月十二日（連絡ノートより S先生記）

この頃友だちと口げんかをしています。K君が昼食を食べ終り、「僕一番」と言うと、T「ちがうよ、N君（年長児）だよ」と否定して、二人でしばらく「ちがうよ、ちがうよ」と言い合い、最後にTが「じゃ明日見てもみようぜ」と言っておさまりました。自分をいっばいっばい出しているように思えました。

三月に入ると、少しずつ様子が変わってきた。ひとりでも、友だちと遊べるきっかけをみつけようとしている。また、友だちの中で自分をはっきり出してつき合えるようになった。新しい友だちを模索しながら、自分を見い出して行った。友だちと遊ぶ時、自分を出して自分の遊びが出来るようになった。

三月二十日

○お迎えに行くと、年上の子どもとTはいい表情で遊んでいた。

○家で体重を測ると、やっと15kgに達し、Tは大喜びで、祖母にも話しに行く。身長も測るように言い、測ると99cmになっていた。二週間に0.5cmものびた。

三月下旬になると、友だちとよく遊べるようになった。Tは自分で克服することができ私もうれしかった。体も重たく、大きくなり自分でも成長を感じたことだろう。そしてうまく友だちと遊べた日は、線路がたとえ人にこわされていても、自分からこわして、さっさと新しいものを作り上げる。その変化はめざましいものである。

○三月二十五日（連絡ノート S先生記）

「一年生になったら、一年生になったら……」と大きな声で歌います。昼食後も部屋をかけながら歌っています。ひとつ大きくなる喜びと一年生と結びつけているのかしら。

私も隣の部屋で、Tの大きな歌声を聞いた。屈託なく歌うTは、大きくたくましくなった実感を感じているように思えた。

おわりに

九ヵ月間のTの歩みをふりかえり、私は母親として、

また保育者として教えられた。

子どもは自ら育つ力を持っている。しかし時に心に問題があると、遊びが停滞し、子どもに生き生きさが乏しくなる。心の問題とは、たとえば友だち関係がうまくいかない、またこれだという自分の遊びがみつからない等である。しかし、ひとたびその問題が乗り越えられると、以前よりひとまわり大きな自分へ成長している。私は三才のTが、友だちを通して、大きく成長する過程をみることでできた。また、友だちのすばらしさ、大切さをしみじみと教えられた。

九月の声を聞くと、そろそろ秋だと感
じます。八月三十一日と九月一日はたっ
た一日しか違わないのに、意識の上で
は、ずい分時間的距離があるような気が
します。夏休みの最後の日である八月三
十一日は、なんとも淋しく、なごりおし
い気がしたものです。楽しかった夏の思
い出の数々がよみがえって、また、あの
時にもどりたいと思うのでした。

一日がやけに早くすぎて、八月中、あ
んなに時間がゆっくりと流れていったの
が、まるでうそのように、あつという間
に夕方になってしまふのでした。

夏休み中に、あれこれたまった旅の思
い出の品々や友人からの絵はがき、写真
など、休み中にほとんど使うことのなか
った勉強机の上にたまったものを、ひと
つひとつ、いつくしみながら、かたづけ
ます。その時、「なぜ、九月一日が来て
しまうのか」と、時間の流れてゆくのを、
うらめしく思ったものです。

夏休みの足跡を、すべて消して、明日
から始まる二学期のために、ノート、鉛
筆などをそろえます。そこまでやると、
もう、夏休みに対する心の執着も序々に
薄れてゆくのですが、それでもふと夏の
あの白っぽい日射しや麦わら帽子のチク
チクとした感じが思い出されて、明日へ
の準備の手も、遅れがちになるのでし
た。

子供の頃の八月三十一日は、ひとつの
大きな区切りの日でした。大人になり、
その区切りがいつしかなくなり、八月も
九月もほとんど差がなくなつたばかりか
暑い八月が終わり、一日も早く涼しい九
月が来ることを心待ちにさえするようにな
りました。

フリーという仕事をしていると、季節
の移り変わりも、また、毎月の流れも、
曜日感覚さえ、うすれてゆくのです。
そんな日常の中で、ふと八月三十一日
に目をやり、昔の感覚を思い出しました。

幼児の教育 第八十六巻 第九号

九月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十二年八月二十五日 印刷

昭和六十二年九月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

オペレッタ ベスト 4

藤田妙子著

B 5 判・188頁・定価2,000円

飛翔する多彩なファンタジー、
軽妙で思わずふきだしたくなる
内容、最も強調したいこと、そ
れは、作品が全員参加を前提に
つくられていて、出演する子ど
もの誰もが主演であり、力いっ
ぱい表現できること。

プロットと歌と身体表現、それ
に伴奏がみごとにとけあって、
子どもの欲求にぴったりである
こと。

詩と音楽、踊りと劇、絵と工作
がすべて含まれており、子ども
の生活経験を豊かにする表現教
育の題材として最適であること。
この生命のかよった魅力的なオ
ペレッタを子どもたちとともに
楽しんでください。

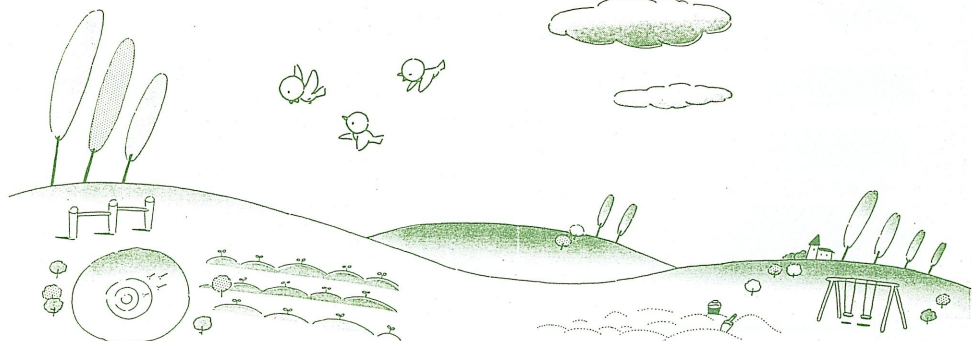
幼児指導の基礎

●イラスト資料

全国幼稚園教育研究協議会編著

B 5 判・144頁・定価1,600円

幼稚園において幼児を指導する
際に、教師は、人としての基礎
・基本を身につけるようにする
ことが大切です。そのためには、
教師自身が、指導の意味を明確
にし、自信をもって、的確かつ
効果的に指導できるようにする
ことが必要でしょう。本書は、
その内容をイラストでわかりや
すく説明しています。



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

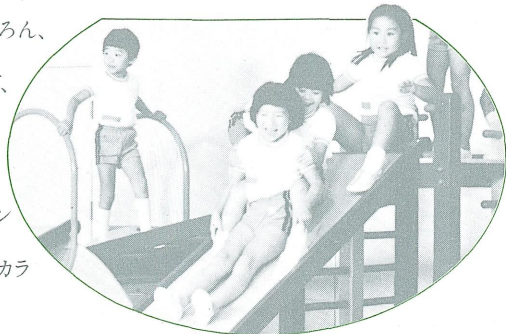
のびのび自由に、活発に。元気な子どもの室内遊具。

キンダートリムランド[®]

遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育む
システム遊具。単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩なバリエーションが可能。システム遊具です。〈実用新案・意匠登録出願中〉

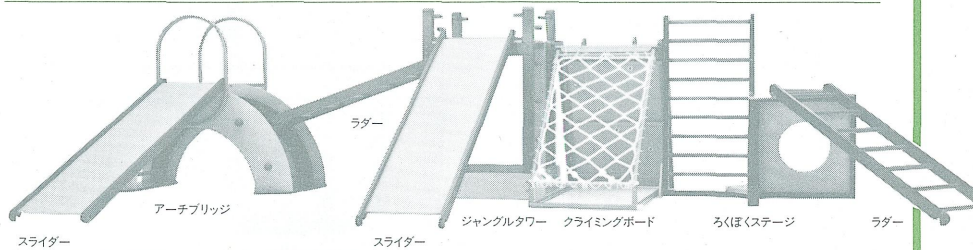
■特長

- それぞれの遊具は単体で遊ぶことはもちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。



■生産物賠償責任保険付

総合セットコンビネーション例



総合セット 3025-10 ¥750,000

ジャングルタワー、ろくほくステージ、アーチブリッジ、クライミングボード 各1、スライダー、ラダー 各2

ジャングルタワー	ろくほくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ¥170,000	3025-02 ¥150,000	3025-03 ¥170,000	3025-04 ¥150,000	3025-05 ¥37,000
●木製 ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製 ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製 ポリウレタン塗装 スチールパイプ 焼付塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製 ポリウレタン塗装、 スチールパイプ 焼付塗装、 ビニロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	ラダー 3025-06 ¥23,000

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館